「税金＝未来へのバトン」

住山　莉子

私は昨年戦後八十年という節目の年に文京区立中学校平和特派員として沖縄を訪れた。実際にひめゆり平和祈念資料館を見学して、展示や映像に触れる中で今でも忘れられないほど強く心に残った。そこには、沖縄戦で動員されたひめゆり学徒隊の生徒や教師の遺品、家族との写真、沖縄陸軍病院での過酷な看護体験や戦火の様子の大型証言本、生存者の証言映像など数多くの展示がされていた。特に壁一面に貼られた犠牲になった人たちの顔写真そして一人一人のプロフィールに胸が締めつけられる思いがした。展示からは私と同年代の生徒たちが犠牲となり、沖縄戦によってかけがえのない日常や未来を奪われた現実を目の当たりにし、言葉を失った。実際に資料館での展示などを通してその現実をこれまで以上に身近なものとして受け止められた。

このような戦争の記憶を後世へ伝え、私たちが平和について学び続けられるのはなぜだろう。そう考えたとき、資料館の運営や維持、展示資料の保存は税金によって支えられていることに気づいた。

税金というと「消費税」や「増税」という言葉を思い浮かべ、マイナスのイメージを抱く人が多い。しかし、私たちが安心して暮らせているのは税金のおかげだ。毎日学校に通えること、道路や公園などの公共施設を利用できること、事故や災害、急病の際に救急車や消防車を利用できることなど、こうした当たり前の日常は多くの人が納める税金によって成り立っている。

税金への見方が変わった私は、その使われ方が気になり調べてみた。すると、少子化対策として医療保険料に上乗せして徴収をする「子ども・子育て支援金制度」を設けたり、日本の防衛力を強化するため「防衛特別所得税」の創設に向けた取り組みが進められたりしていることを知った。このことから、安心安全に暮らせる平和な社会を築き未来を受け継いでいくためには、国民一人一人が納める税金、つまり納税が必要不可欠なのだと感じた。納税には、大きく分けて国税と地方税の二つ、約五十種類もの税目があり、それぞれが異なる役割を担いながら私たちの生活を支え続けていることも知り、驚いた。納税は、よりよい未来を築くための投資なのである。

私は今回の体験から、税金とは「みんなで支え合い、安心安全に暮らせる未来を築くための仕組み」なのだと実感した。私が大人になったら、ただ納税をするのではなく、その使われ方にも関心を持ち続けたいと思う。そして、一人の納税者として税金を納め、誰もが安心して安全に暮らせる社会や平和な未来を支える一員になりたい。戦争を体験していない私たちが納税をして、未来の日本が平和であり続けられるようにしようと強く決意した。